

平成26年度 教育事業実施報告書

- 1 事業名 青少年体験活動 AWAJI ミーティング
～今、求められる冒険プログラムのあり方～
- 2 趣 旨 青少年育成に携わる関係者及び団体等が集まり、冒険教育における共通のテーマについて互いの考え方や事例を発表・共有するとともに、新たな連携、創造を生む場を提供する。
- 3 実施日 平成27年3月2日(月)～3日(火)
- 4 募集定員 50名
- 5 参加者 58名
- 6 参加者内訳 男性47名、女性11名
青少年教育施設職員28名、青少年教育関係団体職員16名、大学教員2名、大学生8名、大学院生1名、無所属3名
(兵庫県34名、大阪府7名、島根県4名、奈良県3名、福井県3名、岡山県1名、広島県1名、香川県1名、和歌山県1名、神奈川県1名、新潟県1名、群馬県1名)

7 講師

(1) 全体会1 「今、求められる冒険プログラムとは？」

- 三丸 真功 氏 有限会社ちゆるんカンパニー クリエイティブディレクター
西島 大祐 氏 鎌倉女子大学短期大学部初等教育学科 講師
榎本 英樹 氏 NPO法人生涯学習サポート兵庫 あそびクリエイター

(2) 分科会1・2 (※1. 2は同じ内容です)

① 冒険プログラムの作り方 (企画について学びたい方対象)

- ゲスト：榎本 英樹 氏 NPO法人生涯学習サポート兵庫 あそびクリエイター
小延 偉公 国立淡路青少年交流の家 企画指導専門職

② 冒険プログラムの広め方 (広報活動に興味のある方対象)

- ゲスト：伊野 亘 氏 国立妙高青少年自然の家 所長
内藤 勲 氏 ブログアドバイザー
三丸 真功 氏 有限会社ちゆるんカンパニー クリエイティブディレクター

③ 冒険プログラムの深め方 (取り組みをステップアップしたい方対象)

- ゲスト：西島 大祐 氏 鎌倉女子大学短期大学部初等教育学科 講師
蓬田 高正 国立淡路青少年交流の家 事業推進係長兼企画指導専門職

8 日 程

				12:30	13:00	13:10	14:45	15:00	18:00	18:30	20:30	
1 日目					受付	開 会 行 事	全 体 会 1	休 憩	分 科 会 1	休 憩	情 報 交 換 会	
		6:30	6:55	9:00		12:00	12:15	13:00	14:00	14:30		
2 日目	起 床	朝 の 集 い	朝 食	退 所 点 検	分 科 会 2	休 憩	昼 食	全 体 会 2	閉 会 行 事	ま と め	※分科会1. 2は同じ内容です。	

9 プログラムの内容

【全体会1 (音楽室)】

大本所長、北島次長の進行のもと、まずこの事業への想いやねらいについて話があった。自然体験活動の指導者の立場から、冒険プログラムについて実践されている方、マスコミとして活動を取り上げている方、大学で研究されている方などを招いて、様々な視点から考え深く掘り下げる。また、参加者とゲストの距離を近くして、ライブ感のある全員参加型ミーティングにしたいと説明があった。

全体会では、NPO 法人生涯学習サポート兵庫が無人島で行ったチャレンジアイランド（2012. 9. 10 テレビ放映）の番組特集を視聴し、取り組みとマスコミの受け止め方の一端を紹介した。撮影に関係したゲストの榎本英樹氏、三丸真功氏と研究者の立場から西島大祐氏が自己紹介と冒険プログラムに対するそれぞれ想いを述べた。

(榎本氏)：参加者の皆さんに、チャレンジアイランドを観ての感想が聞きたい。私達はあそびを提供している。あそびは成果よりプロセスが大事。いきなり無人島ではなく、いくつかの段階を踏んでたどり着いた企画。この企画で子どもたちには自分で考え行動する環境を提供した。その中で自分の役割を見つける力と、命について考える力を感じて欲しい。学んだことがその後の生活でどう活かされるかが大事だと考える。



(三丸氏)：取材当時、いじめ問題などがマスコミで大きく取り上げられていたため、命を考えるイベントは世の中に受け入れられやすいと思い取材してみようと思った。取材の苦労話はいろいろある。アウトドア活動をあまりしていない自分には、何もかもがきつかった。どんな内容の企画が取材対象になりやすいか分科会でふれてみたい。



(西島氏)：自然体験活動の取り組みで、成果を目に見えて示すのは難しい。冒険プログラムの中の冒険は、大人が安全面等をコントロールしている中で試されるものではないか。子どもたちは、困難な問題に対してストレスを感じながらそれに耐えて克服しようとするチャレンジバイチョ

イスの設定がとても重要と考えており、分科会では冒険プログラムの歴史やこれまでの流れについて話したい。

参加者からは「毎回鳥は全員で食べてしまうのか」「やってみたい事、願望とうまく実現できない現実に悩んでいる」「運営するスタッフはどのような学びがあったか」などの質問があった。ゲストはそれぞれの立場から意見を述べ、ゲスト同士や参加者とディスカッションすることで共に考えを深め、各分科会につながる話し合いが十分できた。

分科会1・2は3会場に分かれ同じ内容で2度実施した。参加者は2日間で2分科会に出席し、冒険プログラムに関するゲストの事例発表に耳を傾け知見を広げた。

【分科会1 冒険プログラムの作り方 (第7研修室)】

分科会の流れを説明し、参加者同士で自己紹介を行った。1つめの事例発表として、国立淡路青少年交流の家の企画指導専門職、小延偉公よりジュニアチャレンジ淡路島一周の準備・運営について発表した。ジュニアチャレンジ淡路島一周についてまとめたビデオの視聴後、事業の概要を説明した。事業は、積極性がなく自己主張や仲間作りが苦手な子どもたちに、ジュニアチャレンジ淡路島一周を通して成功体験から自尊感情や仲間の大切さなどを学んでもらうことをねらいに、平成24年度から新たな看板事業としてスタートした。事業実施までの具体的な準備の中で、特に事前踏査とふり返りの重要性にふれた。事業の肝になる部分で、実際の取り組みから見えてきた事や課題への対応などが話された。参加者は6グループに分かれ発表に対してディスカッションし、「歩く距離を設定するのに必要な判断基準は何か」「冒険プログラムと地域との関係性について」などの質問があった。企画しようとしている冒険プログラムと比較して考えている参加者も多く、想いの強さや企画に対する悩みなど全員で共有する部分が多かった。

2つめの事例発表として NPO 法人生涯学習サポート兵庫の榎本英樹氏から、全体会で視聴したチャレンジアイランドで、無人島で過ごすために必要なルールとなる10の掟（島に電気・ガス・水道なし、火は火打ち石・火打ち金を使用、夜「カタライの壺」に想いをしたためる等）について発表があった。この企画の大きなねらいは、自分の役割を見つける事と命の大切さを感じる事にあると話された。参加者はグループごとに意見を出し合い、自らが企画するならどのようなものを作るか話し合った。ワークショップは、参加者全員で冒険プログラムに必要なだと考えるポイントを付箋に書いてホワイトボードに貼り付けポイントごとに整理した。全員で意見を出し合うことで、実際の冒険プログラムの作り方に反映させる内容を共有した。



【分科会2 冒険プログラムの広め方 (第8研修室)】

分科会の流れを説明し、参加者同士で自己紹介を行った。1つめの事例発表として、国立妙高青少年自然の家所長、伊野亘氏より参加者募集の方法と成果、事業成果の発信について発表があった。参加者・利用者呼び込む情報提供として、地域のキーパーソンとなる人に必要な情報を提供し、所のリピーターやファンに広げてもらうことで確実な情報提供につなげている。幼児対象プログラムについては、1つの保育園との連携プログラムが



やがて市全体に広がりを見せた。ターゲットを絞り、必要な情報を提供する事が大事と考える。事業成果の発信については、施設の経営方針・運営方針・事業方針を利用者にわかりやすく広く発信するため広報誌を作成した。中身を工夫し、気軽に見てもらえる週刊誌のようなタイプにした。写真やイラストを多用し、キャッチコピーや文章も専門家と共に検証して広報に使える形にした。

2つめの事例発表はブログアドバイザーの内藤勲氏から、インターネットを使ったイベント告知や関心を高める発信の仕方について発表があった。インターネットなら事前に告知することができ、いつでもどこでもその情報を確認することができる。相手の心に届く告知の仕方について、道端で営業するスイカ屋の広告看板を例に挙げ、受け手にただ伝えるだけでなく、いかに興味・関心を持ってもらえるかが重要と話した。インターネット広報では Facebook で関心を高め、ホームページやブログを申込につなげるツールとして使用し、リピーターを作るためにメールマガジンを活用する。いくつものメディアを連携させることで広報は大きく違ってくるとの説明があった。また、関心を高める発信については、伝えようとする企画（商品）の中身（性能）より、何が得られるか（メリット）を示すことで関心が高まる。細かな発信ポイントを把握し、ニーズを捉えることでターゲットは自ずと絞られてくると成功事例を挙げて説明した。

3つ目の事例発表として、(有)ちゆるんカンパニークリエイティブディレクターの三丸真功氏から、マスコミの立場で取材対象になる要素と映像による広報について発表があった。チャレンジアイランドには他のキャンプにない魅力があり、直感的におもしろいと感じた。いかに興味を持ってもらえるかがおもしろさにつながる。また、テーマや伝えたいことがはっきりしている企画は、社会へのメッセージ性も強く取材したくなる。映像資料は視聴者が疑似体験でき関心を高める有効なツールである。テレビ放送以外に拡散性の高いWEB配信があり、アイデア次第ではコマーシャル動画がテレビ以上の視聴数を稼ぐこともある。

事例発表後、参加者からゲストへ質問があり「心を掴む上手な文章の書き方」や「SNS を活用することによるリスク」「子どもの顔を写さずインパクトのある写真や動画は撮るコツはあるか」についてゲストと参加者の間で熱のある意見交換が行われた。話は広報の視点から一般の方が社会教育に何を求めているのか等、発展的な広がりがあった。



【分科会3 冒険プログラムの深め方 (音楽室)】

分科会の流れを説明し、参加者同士で自己紹介を行い、取り組んでいる企画のことや指導者としての考え方などについてお互いにディスカッションしてた。1つ目の事例発表として、鎌倉女子大学短期大学部初等教育学科講師の西島大祐氏より冒険プログラムの歴史と現在の動向について発表があった。冒険の要素には①危険が伴うこと、②まずやってみること、③未知の体験に対する憧れなどが挙がる。ただし、サバイバル体験が必ずしも冒険とは限らない。そこにどのような意図があり、子どもたちが目的に対し成果を上げているかが大事だと考える。次に冒険教育の創始者としてクルト・ハーン (Kurt Hahn 1886~1974) の生涯と考え方、Outward Bound School (以下 OBS) を紹介する。クルト・ハーンが活動の中で



1886~1974) の生涯と考え方、Outward Bound School (以下 OBS) を紹介する。クルト・ハーンが活動の中で

目指していたのは、国家規模での社会の健全化である。OBSのプロセスモデルは、自然体験の取り組みの中でトライ&エラーをくり返すことでふり返り、その後の人生をよりよくするサイクルにつながってくる。また、心地よく過ごせる所から抜け出すことでかかるストレスも冒険プログラムの要素の一つと捉える。冒険教育の広がりとして、アメリカのポール・ペッツォ (Paul K. Petzoldt 1908~1999) を取り上げ、ウィルダネス・エデュケーション・アソシエーション (以下 WEA) の設立と、ウィルダネス・エクスペディションの展開について解説があった。ポール・ペッツォは 1970 年代に WEA を設立し、構造化された教育要素と指導者資格指導方法を確立した。指導方法は現在 6 要素 (①野外生活②行動計画③リーダーシップ④リスクマネジメント⑤自然との共生⑥教育) がある。アメリカでは冒険教育を人工的に行う施設を活用したスタイル (Project Adventure) の展開がある。オクラホマ州にはタルサ・チャレンジコースがあり、室内・室外の両方を併せ持った施設は世界最大規模で、82 のエレメントがあり 1200 名が参加できるようになっている。障がいを持った人のための道具も用意されているところがアメリカらしいと感じた。

2 つめの事例発表として国立淡路青少年交流の家事業推進係長兼企画指導専門職の蓬田高正が冒険プログラムの効果測定と事業効果について発表した。自身、子どもの時の原体験が今の自然体験活動に結びついており、自然体験は子どもにとって必要だと強く感じている。冒険



プログラムは、冒険的な手法を用いた体験活動でねらいを達成するものだと考えている。また、冒険は野外というイメージが強いが、必ずしも野外ばかりとは限らない。子どもたちにはどのような体験が効果につながるか。効果要因として①グループで何かを成し遂げ解決する場面、②苦しいことに自分で挑戦して成功する体験、③自然に直に触れる機会、④仲間と一緒に生活し暮らしを作るなどがあげられる。冒険プログラムで見ると②が該当すると思われるが、他の要素も勘案するとねらいにあわせた手法としての冒険プログラムでいいのではと考える。

参加者から冒険プログラムについて冒険と室内プログラムの関係性や、冒険という言葉の定義、プロジェクトアドベンチャーは野外教育なのか冒険教育のかなど、日頃から思う疑問について多様な意見が相次ぎ、ゲストや参加者間でディスカッションを深めることができた。

【全体会 2 (音楽室)】

参加者全員にフリップを使って 2 日間のふり返りを行った。「2 日間で一番印象に残っている言葉」「作り方の一番のポイント」「広め方の一番のポイント」「深め方の一番のポイント」等の問いかけをした。印象に残ったポイントとして、作り方には「ぶれないコンセプト」「こだわり」「2 つの時間」、広め方には「インパクト」「魅力的な看板を人通りの多い道に立てる」「頼る」、深め方には「心を揺さぶる体験」「本気度」「なぜ必要か考えること」などがあり、各分科会の要点にふれる様々な意見があり、参加していない分科会内容をうかがい知る事ができた。また、「職場で活かしたいことは何？」との問いかけに、参加者からは「実践者の話を聞くことでやるべき事をもっと深めたい」「事業のねらいについて今一度内部で共有したい」等の声があり収穫の多いミーティングであった。



10 広 報

【広報手段】

- ① チラシによる広報
 - ・所内での広報（パンフレットラックに陳列、ポスターの掲示）
 - ・大阪府・兵庫県自然学校受入施設に送付
 - ・全県野外活動フォーラム 2014 で配布
 - ・大学に配布
- ② 電子メールによる広報
 - ・兵庫県・徳島県教育委員会、青少年教育施設に広報
 - ・運営協議会委員、NPO 団体、企業、青少年教育施設職員、行政関係者、当所教育事業参加者、スイちゃんクラブ会員、兵庫県自然学校受入施設に広報
 - ・当所ホームページへの掲載、Facebook による広報
 - ・講師のホームページ、Facebook による広報
 - ・関係団体のメールマガジンやホームページへの掲載による広報
- ③ 新聞への掲載
 - ・神戸新聞の地域欄に募集記事を掲載

11 参加者の声

- ・ 具体的な視点から、全体的なことや個別のことまで様々な話が聞けて興味深かった。
- ・ 講師から貴重な話が聞けて、冒険プログラムについて理解を深めることができた。
- ・ 知見が広がり、人と人との繋がりがよかったです。また、参加したい。
- ・ 自分が持っていない知識や経験の話は聞けてよかった。
- ・ 分科会、情報交換会ともに貴重な意見が聞けてよかった。
- ・ 様々な視点を持つプロの方々がそろわれ、バランスがよかった。

12 担当者の所感

今年度は冒険プログラムにテーマを絞り、3つの視点(作り方・広め方・深め方)から冒険プログラムに求められているものを全体会、分科会で話し合った。自然体験活動の指導に関わる方に参加いただき、それぞれが抱える課題等を共有することができた。今後は参加者同士で新たな連携や取り組みが生まれることに期待する。

冒険プログラムを軸に、これだけバラエティーのあるゲストに参加していただき、盛況に終えることができた。これも、数回行われたワーキンググループによる打合せで様々な意見があつてのことだと考えている。

一方、課題としては以下の点が挙げられる。

① 全体の流れについて

事業全体を通じて参加型で講師参加者共にお互いに学ぶことを大切に、プログラムを進行した。また、全体会・分科会共に事前にプログラムを用意していたが参加者のニーズを引き出すために質疑応答や参加者同士のディスカッションを多く取り入れそれに応じて臨機応変にプログラムを変更していった。その事が参加者の満足度の高さにつながったものと思われる。今後は講師だけでなく職員にもそのようなファシリテート能力を身につけ事業だけでなく普段の利用者に対する指導にも活かせればと思われる。

② 今後の当事業の位置づけ

現在、この「青少年体験活動 AWAJI ミーティング」以外でも関西地区では兵庫県全県野外フォーラムや関西野外活動ミーティング等自然体験活動に関するミーティング系の事業が存在する。この事業も3年目を迎え当所としても国立青少年教育施設としてねらい・対象・プログラム等再度検討していく必要が

あると思われる。